初期経典にみられる仏弟子の表現

並　川　孝　儀
（佛　教　大　学）

初期経典にはゴータマ・ブッダ（釈尊）はいうまでもなく仏教の開祖として，また仏教教団の頂点として描かれ，仏弟子はその従者と位置づけられている。ゴータマ・ブッダと同時代，既に宗教者として一定の評価を得ていたと伝えられるサーリプッタ（舎利弗）やモッガラーナ（目連）を初めとして，ゴータマ・ブッダ滅後時に教団での中心的な役割を果したマハーカッサパ（大迦葉），ブッダの晩年，生活を共にしたアーナンダ（阿難）など，後に十大弟子として列挙されるこうした代表的な仏弟子は勿論のこと，初期経典には悟りへの道を歩んだ数多くの仏弟子が説かれている。こうした仏弟子の伝承が歴史的事実に基づいたものかどうかは実際のところ不明であるが，その疑問は保留したまま，そうした伝承は是認され，ほぼその通りに理解されているようである。仏弟子とは，仏教が興起した当初から文字通りゴータマ・ブッダの弟子であったろうことに疑問の余地も挿みえないが，両者の関係が宗教的属性にも波及したのかという問題になると事情は変わってくる。つまり，両者間の主従の関係が果して宗教上においても存在したのか，しなかったのかという問題，端的に言えば仏弟子たちの宗教上の立場がゴータマ・ブッダよりも劣ったものであったのか否かという点である。こうした点は，従来よりほとんど考察されることのなかった側面であるが，ブッダの固有名詞化や教祖化など最初期の仏教の成立

過程を読み解くための重要な視点となるであろう。

そこで，本論では，比較的初期の仏教事情を知るため，初期経典（ニカーヤ）の中でも韻文資料に見られる用例を中心として，そこに仏弟子が体得した宗教的境地，仏弟子のあるべき理想的な境地など，仏弟子の宗教的境地がどのように表現されているのかを眺め，それをゴータマ・ブッダと比較して，仏弟子とはどのような存在であったのかを探ってみたい。また一方で，ブッダと仏弟子との主従関係がどのように表現されているのかを精査し，両者の主従関係の意味を探ってみたい。

(1) 宗教的境地を示す用例からみたブッダと仏弟子

従来から，仏弟子とは一般的にブッダの従者という主従の関係で説かれたり，ブッダより劣った宗教的な存在として描かれていたが，ここでは宗教的属性もそのように理解してよいものなのかを検討したい。この点に関する研究成果は既に公にしている[(1)]が，本論の構成上記述しておく必要があるので，ここでは最初にその要点だけでもまとめておくことにしよう。

ここで取り上げるブッダと仏弟子に関する宗教的表現とは，それぞれの修飾語であったり，それぞれが主語の場合はその述部の語句を指すが，両者の共通する用例や類似する用例を便宜上六種類に区分してまとめてみた。以下に表示したパーリ語のうち，イタリック体の用語はブッダと仏弟子に用語の上で同一の例を示し，それ以外は類似する表現を示すものであるが，そのうち前者をブッダ，後者を仏弟子の用例とする。

（ｉ）煩悩の滅尽

asita[(2)]（執着がない），*nirupadhi*[(3)]（とらわれを滅した），*vītataṇhā*[(4)]（渇愛を

離れた），mārābhibhū[5] ― māradheyyam atikkanto[6]（悪魔を征服した ― 悪魔の領域を征した），na sammoham āpādi[7] ― mohā sabbe pahīnā[8]（迷妄に陥ることがなかった ― 迷妄をすべて捨て去った），sallakatta[9] ― uddhaṭasalla[10]（煩悩の矢を抜いた者―煩悩の矢を抜いた）

（ii）輪廻・再生

antimasarīra[11] ― dhāreti antimaṃ dehaṃ[12]（最後の身体を保った―最後の身体を保つ）

（iii）三明・神通

pubbenivāsaṃ yo vedi[13]（過去世の境涯を知った），*saggāpāyañ ca passati*[14]（天界と地獄を見る）

（iv）解　　脱

vippamutta[15]（解脱した），*vippamutto sabbadhi*[16]（あらゆる点で解脱した）

（v）涅槃・彼岸

dukkhassa pāragū[17]（苦しみの彼岸に達した），*parinibbuta*[18]（完全なる涅槃に入った）

（vi）そ の 他

aneja[19]（動揺しない），*danta*[20]（よく制御した），*dhīra*[21]（しっかりと確立した），*nhātaka*[22]（沐浴者），*sabbabhūtānukampin*[23]（あらゆる生き物を慈しむ者），*samāhita*[24]（心の安定した），sabbākāravarūpeta[25] ― anekākārasampanna[26]（あらゆるすぐれた徳性を具えた―多数のすぐれた徳性を具えた），sabba-

sattānam uttama[27] ― purisuttama[28]（あらゆる生き物の中で最上の者―人間の中で最上の者），brahmacariyassa kevalī[29] ― suciṇṇaṃ brahmacariyaṃ[30]（清らかな行いを完成した―清らかな行いを実践した），akutobhayaṃ[31] ― maraṇe bhayaṃ n'atthi[32]（決して恐れおののかない―死に対する恐れはない）。

では，ここでいう仏弟子とはどういった存在者をいうのか少し触れておこう。上で列挙したように仏弟子の表現は，煩悩の消滅をなしえた者，涅槃を体得した者，解脱した者，三明の体得者など理想的境地を体得した者として描かれ，ブッダのそれと変わらないことが判る。後代の註釈文献でも，ニカーヤに見られる複数形のブッダを註釈して，「偉大な声聞（mahāsāvaka）」や「声聞覚（sāvakabuddha）」や「独覚（paccekabudddha）」と規定[33]し，また buddhānubuddha を「後の声聞たち（pacchimasāvakā）」ではなく「対面する声聞たち（sammukhasāvakā）」であると註釈[34]していることから，単に出家して修行に励んでいる者を指すのではなく，理想的な修行生活を送り，悟りの境地に目覚めた修行者，またゴータマ・ブッダの直弟子などを指していることからも窺える。こうした仏教修行者だからこそ，かれらの宗教的境地もブッダと同じように表現されているのであろう。実際，仏弟子の中でも，サーリプッタ，マハーカッサパ，アンニャーコンダンニャがブッダと呼称されていた痕跡が文献に見られるのである[35]。

このように，仏弟子の宗教的な表現を眺めてみると，苦悩から解き放たれ，悟りの境地を体得したゴータマ・ブッダと変わらない仏教者像が描かれていることに気づく。確かに，次の項目(2)で述べるように，ゴータマ・ブッダのみに見られる宗教的な特質である衆生救済は，仏弟子には見られない。しかし，仏教が目指した悟りの境地を体得するという意味においてはゴータマ・ブッダもこうしたすぐれた仏弟子も何も変わらないのである。

実は，項目(4)で述べるような教団における主従関係や上下関係が前提となり，そのことが両者間の宗教的内容やその属性にまで波及し，出家者として理想的生活を遂行した仏弟子もゴータマ・ブッダと同様の宗教的属性を有していたという事実が隠されてしまった可能性のあることも指摘しておかなければならない。

(2) ブッダのみに見られる用例

「ブッダのみに見られる」ということは，ブッダ固有であり，仏弟子には見られない表現であるということを意味している。ただ，仏弟子にはなくブッダだけに見られる固有表現はさほど多くない。そのことは宗教上両者にほとんど相違がないことを意味している。しかし，全くないわけではない。その例を挙げておこう。

cakkhumant（〔真実を見る〕眼をもつ），appaṭipuggala（比類なき者），lokanātha（世界の守護者），

これら以外にも ādiccabandhu（太陽神の末裔）や satthar（師）もあるが，これらは呼称や教団上の立場を表現するものである。

これらの用語に比較にならない極めて重要な用例が認められるので，それを示しておこう。

「あなたはブッダです。あなたは師です。あなたは悪魔を征服した沈黙の聖者です。あなたは煩悩の根を断ち切って，自ら渡り終え，この人々を渡す。」

tuvaṃ buddho tuvaṃ satthā, tuvaṃ mārābhibhū muni, tuvam anusaye chetvā, tiṇṇo tāres' imaṃ pajaṃ. (Sn. 545, 571, Th. 839)

ここで，注意しなければならないのは，後半部 d 句の「自ら渡り終え，

この人々を渡す」という句である。この偈の主語は「師」と表現されていることから，「自ら渡り終え，この人々を渡す」という行為者はゴータマ・ブッダである。自ら渡り終えた後に，自らが渡ったのと同様にして人々を渡すという行為には，自らが悟った後に他の人々を同じようにして悟りの世界に導くという衆生救済の行為が説かれている。この救済性は，単に「慈しむ」とか「世を照らす」といった他者への自己表現に止まらず，悟った者の行為が他者において実現されるという意義を有している点に真意がある。

この用例は，後に説かれる菩薩の誓願を示す代表的な四弘誓願説の源流と位置づけられる。四弘誓願は，√tṝ（渡る），√muc（解き放す），ā√śvas（生き返る），pari-nir√vṛ（完全に消す）という 4 種の語根それぞれの過去分詞形（past participle）と使役形（causative）をもって説かれたものであるが，上で取り上げた用例の「自ら渡り終え，人々を渡す」は四弘誓願の最初にある語句と同じである。初期経典（ニカーヤ）には ā√śvas の使役形の用例は見られず，また√muc や pari-nir√vṛ の使役形も若干見られるにすぎず，共に過去分詞形と使役形の対で説かれることはない。唯一見られるのが，先に挙げた√tṝ の用例であることから，この用例が四弘誓願説の源流と位置づけられるのではないかと考える。(36)

仏弟子には表現されずに，ブッダに対してだけこの衆生済度の属性が付与されたことは，唯一のブッダ，換言すれば固有名詞となったブッダの宗教的属性であることを意味しているのであろう。こう考えれば，この衆生済度の属性が付与されたことと唯一のブッダの誕生とが軌を一にしているのではないかと推測できるのである。つまり，多くのブッダから一人だけのブッダという仏教の変容する最初期の過程でこの救済性が唯一のブッダに新たに付与されたのではないかということである。

(3) 仏弟子に関連する原語について

仏弟子を指す漢訳は一般に「声聞」とされ，その原語は sāvaka である。sāvaka は√śru（聞く）という動詞から派生した名詞で，ブッダの教えを「聞く者」を意味する語である。それでは，実際に用いられている声聞の表現例を見てみよう。

「仏弟子は，まさに語った通りに実行する人でした。」

yathāvādī tathākārī, ahū buddhassa sāvako,（Sn. 357ab, Th. 1277ab）

この偈は，仏弟子であるニグローダ・カッパを称讃して詠われたものである。他にも，

「そこで仏弟子はこのような教えを実際に行うであろう。」

yattha etādisaṃ dhammaṃ, sāvako sacchikāhiti.（Th. 201cd）

また，ヴァンギーサ長老がコンダンニャ長老を讃嘆して詠った偈に

「師の教えを実行する仏弟子が得ることのできるのは，・・・」

yaṃ sāvakena pattabbaṃ, satthusāsanakārinā, ・・・（Th. 1247ab, SN. VIII-9-6ab）

とある。これらの用例を見ると，sāvaka は語義からすれば「聞く者」であろうが，実際のところ用例からは「実行する者」が強調された用法であることは興味深い。

ところで，先にも触れたように後代になると，この sāvaka の存在も二種に区分されていたようである。註釈文献によると[37]，ブッダに対面し現前で出家する声聞たち（sammukhasāvakā）と，ブッダと直接見えることなく後の仏弟子のもとで出家する声聞たち（pacchimasāvakā）と，声聞をブッダの弟子とそれ以外とに使い分けされていたようである。

sāvaka 以外にも，仏弟子に該当する原語に antevāsin がある。antevāsin

は，接頭辞 ante-（の近くに，の内に）と√vas（住む）より成る語で，「共に住む者」といった意味をもつ。この用例は韻文資料にはほとんど見られないが，次の偈に見ることができる。

「私は弟子となって学修した」antevāsi 'mhi sikkhito,（Th. 334d）

この用法は，「私はかの世尊にまみえ，精舎で〔世尊と〕共に住んだ（vihāre ca sahavāsiṃ）[38]。」の saha-√vas と同じであろう。

尚，弟子という意味をもつ sissa の用例は，バラモンの弟子の場合に用いられ[39]，仏弟子としての用例はこれらの韻文文献に見られない。また，漢訳で「弟子」と訳されるのは，sāvaka, antevāsin, sissa とである。

(4) ブッダと仏弟子の主従関係を示す用例

これより，ブッダと仏弟子の主従関係を示す用語を中心にして，仏弟子の存在を考察してみたい。

①主従関係を示す仏弟子の表現

まず，主従関係を示す仏弟子の表現を見てみる。ブッダが師（satthar）[40]と呼ばれるのに対して，仏弟子は次の表現がされる。

後継者を意味する dāyāda が用いられるが，その例は「ブッダの後継者である比丘は（buddhassa dāyādo bhikkhu）[41]」，「清浄な方の清浄な後継者は（suddho suddhassa dāyādo）[42]」，「ブッダたちの中で最もすぐれたお方の後継者に（dāyādaṃ budddhaseṭṭhassa）[43]」などである。dāyāda のほとんどはマハーカッサパとコンダンニャに表現されているが，その理由はマハーカッサパがブッダからの最初の法の相続者であること，コンダンニャが初転法輪の時に最初に悟った者であることを考えれば，この用語が両者に

使用されるのは妥当である。その他，息子（putta, suta），実子（orasa），娘（dhītā）など，親子関係という譬喩的表現[44]によって，ブッダと仏弟子の関係を示した用例が見られる。

② anu- 接頭辞の用例とその意義

ブッダと仏弟子の主従関係を示す表現は，anu- 接頭辞の付した動詞およびその派生語に見られる。以下，それらの用例を示してみる。

（ｉ）anubuddha

まず，buddha に接頭辞 anu- が付いた anubuddha の例を見てみよう。

「懸命に精進した長老コンダンニャはブッダに従って悟った。」

buddhānubuddho yo thero, Koṇḍañño tibbanikkhamo,（Th. 679ab, cf. 1246ab, SN. VIII-9-6）

この anubuddha は，「ゴータマ・ブッダに従って悟った」という意味をもつ複合詞 buddhānubuddha の後半部分で用いられ，コンダンニャ長老を指し示す語である。つまり，anubuddha は，〔ゴータマ・ブッダ〕に従って，或いは〔ゴータマ・ブッダ〕に続いて悟った者という意味をもつ語である。複合詞の形で用いられるのは，韻文資料ではコンダンニャ長老に対してのみであるが，散文資料では在るべき理想的な修行を実践している仏弟子（sāvaka）を讃嘆する場合にも使われている例がある[45]。

anubuddha が単独で用いられる例は散文資料に見られるが，それが dhammasenāpati を指している[46]ことから，サーリプッタを表現した語であることが判る。

このように，anubuddha は，具体的にはコンダンニャやサーリプッタを表現し，他にも前述した「対面する声聞たち（sammukhasāvakā）」のよう

な特定はされていないが理想的な生活を実践している仏弟子に対して用いられていることが判る。

（ii）その他の用例

ここでは，anubuddha 以外の anu- 接頭辞の付した動詞およびその派生語の用例の中からブッダと仏弟子の主従関係を見る。まず，ゴータマ・ブッダとサーリプッタの関係を示す例を挙げる。

「私が転じた輪，つまり最高の真理の輪を，如来に続いて出現したサーリプッタが転じる。」

mayā pavattitaṃ cakkaṃ, dhammacakkaṃ anuttaraṃ, Sāriputto anuvatteti, anujāto tathāgataṃ.（Sn. 557）

「大いなる智慧があり，心が安定し，〔ゴータマ・ブッダが転じた真理の〕輪を続いて転じる長老は，」

cakkānuvattako thero, mahāñāṇī samāhito,（Th. 1014ab）

先の偈には「～の後を転がる（anu-√vṛt）」と，「～の後に生まれる（anu-√jan）」という動詞の過去分詞の形で，後の偈は直接サーリプッタを修飾する形はとっていないが，サーリプッタを詠った偈で，「～の後を転がる（anu-√vṛt）」という動詞の形容詞で表現されている。これらから，サーリプッタは「如来（ゴータマ・ブッダ）に続いて出現したサーリプッタが（anujāto tathāgataṃ）」，「〔ゴータマ・ブッダが転じた真理の〕輪を続いて転じる長老は（cakkānuvattako thero）」と表現されている。[47] anu-√jan によって時間的な前後を意味する主従関係を，anu-√vṛt によって真理の継承を意味する主従関係が表現されているようである。

次に，ヴァンギーサ長老がブッダと弟子であるニグローダ・カッパを詠った偈に

「私は神の中の神（ブッダ）に礼拝する。人間の中で最上なる者よ，大いなる勇者に続いて出現した，竜の実子である竜であるあなたの息子（ニグローダ・カッパ）に〔礼拝する〕。」

taṃ devadevaṃ vandāmi, puttaṃ te dvipaduttama, anujātaṃ mahāvīraṃ, nāgaṃ nāgassa orasan.（Th. 1279）

とあり，ここでもニグローダ・カッパはサーリプッタと同様に時間的な前後を示す関係で「大いなる勇者（ゴータマ・ブッダ）に続いて出現した者（anujātaṃ mahāvīraṃ）」と表現されている。

以上は，サーリプッタやニグローダ・カッパの例であったが，これより仏弟子一般に対する表現例を眺めてみる。まず，anu-√śikṣ（学ぶ）という動詞の用例を見ると，

「禅定する人々は，私が説いた教えのことばを〔私から〕学修する。」

ye me pavutte satthipade, anusikkhanti jhāyino.（SN. II-2-2-2）

「それ故に，かの世尊の教えに従って，常に怠らず〔世尊を〕礼拝して，学修すべきである。」

tasmā hi tassa bhagavato sāsane, appamatto sadā namassam anusikkhe.（SN. VIII-8-10）

と，いずれも仏弟子は世尊の教えを世尊に従い学修しなければならない者であると説かれている。[48]

③「ブッダの教えが実践された」kataṃ buddhassa sāsanan[49]

では，ここで仏弟子の表現の定型として Theragāthā や Therīgāthā に見られる「ブッダの教えが実践された（kataṃ buddhassa sāsanaṃ）」という用例から，仏弟子という存在を眺めてみよう。この表現は，声聞（sāvaka）の表現にも見られた「師の教えを実行する者

(satthusāsanakārin)」にも通じる。

では，ブッダの教えに従って修行を実践したという意味をもつこの定型句の中，buddhassa sāsanaṃ に関する用例を見てみよう。この用例を取り上げたのは，実はこの用例には「ブッダの教え」と「仏弟子の教え」という表現があり，両者は明確に区別して説かれており，この表現の相違によってブッダと仏弟子という存在に差異が設けられている点が明らかになったからである。それでは，まず「ブッダの教え」の用例を取り上げる。

(ｉ)「ブッダの教え（sāsana)」の場合

この buddhassa sāsana（或いは buddhasāsana）用例は，以下の表現でも見られる。

「ゴータマの教えに基づいて，無欲で」

nikkāmino Gotamasāsanamhi,（Sn. 228b, cf. SN-II-2-2-2）

「ブッダの教えを楽しみ，・・・アヌルッダは瞑想する（√dhyai)。」

rato buddhassa sāsane,・・・Anuruddho 'va jhāyati.（Th. 894bd）

「モッガラーナは，無執着な人（√śri 依る）の教えにもとづいて」

Moggallānagotto asitassa sāsane,（Th. 1184b）

「私は戒を身につけ，師の教えを実行している」

・・・ahaṃ sīlasampannā, satthusāsanakārikā,（Thī. 113ab）

「それ故に，かの世尊の教えに従って，常に怠らず〔世尊を〕礼拝し，学修すべきである。」

tasmā hi tassa bhagavato sāsane, appamatto sadā namassam anusikkhe.（SN. VIII-8-10）

このように，「ゴータマの教え（Gotamasāsana)」，「無執着な人の教え（asitassa sāsane)[50]」，「師の教え（satthusāsana)」，「世尊の教え（bhagavato

sāsane)」と，教えはいずれもゴータマ・ブッダによるものであるから，「教え（sāsana)」という語はゴータマ・ブッダが説いた教えを表現する時にのみ用いられるのではないかと考えられる。

(ii)「仏弟子の教え（anusāsanī)」の場合

ゴータマ・ブッダが弟子に説く時に表現された「ブッダの教え(sāsana)」に比較して，仏弟子が弟子に対して説く「仏弟子の教え」の場合はどのような語で表現がされているのか，用例を見る。

〔仏弟子＋anusāsanī の用例〕

「怠ることなくつとめ励むべきである。これが私の教えである。私は般涅槃に入るであろう。私はすべてにおいて解脱している。」

sampādeth' appamādena, esā me anusāsanī, handāham parinibbissaṃ, vippamutto 'mhi sabbadhi.（Th. 1017）

この偈はサーリプッタの言葉とされたものである。a 句の sampādeth' appamādena の部分は，Mahāparinibbānasuttanta（『大般涅槃経』）に説かれるゴータマ・ブッダの遺言 vayadhammā saṃkhārā, sampādeth' appamādena[51] の後半部分に該当するが，ここでのサーリプッタの言葉はゴータマ・ブッダと全く同じではなく，その一部を語ったものである。その際，サーリプッタの説いた教えは，sāsana ではなく，anusāsanī と表現されていることが判る。

次に，尼僧の例を見てみよう。

「彼女の言葉を聞いて，私は〔彼女の〕教えを実行した。」

tassāhaṃ vacanaṃ sutvā, akāsiṃ anusāsaniṃ,（Thī. 126ab, cf. 178ab）

これは，チャンダー尼がパターチャーラー尼に対して説いた偈で，ここ

の anusāsanī はパターチャーラー尼が説いた教えを指している。

他にも，仏弟子からその弟子へと説く教えを実践すれば，という設定と解釈できる偈にも，仏弟子の教えが anusāsati と動詞形で表記されている例がある。

「彼女が私（ウッタマー尼）に説いた通りに彼女の教えを聞いて」

tassā dhammaṃ suṇitvāna, yathā maṃ anusāsi sā,（Thī. 44ab）

「他人に教えるように，そのように自らも実践すれば，」

attānañ ce tathā kayirā, yath' aññam anusāsati,（Dhp. 159ab）

以上の用例から，仏弟子がその弟子に説き示す「教え」の場合は anusāsati（anu-√śās）と表記されていることを知ったが，更にそのことを確認できる用例がある。それは，

「あなたの教えが実行された」

katā te anusāsanī（Thī. 180d）

という句である。これは，ウッタラー尼がパタチャーラー尼の教えを聞いた状況での言葉である。このことから，おそらくウッタラー尼はパタチャーラー尼の弟子に当たるのであろう。この偈は，まさに「ブッダの教えが実践された」kataṃ buddhassa sāsanaṃ という表現に対応するものである。この偈の te は，kataṃ buddhassa sāsanaṃ の buddhassa と置換され，それがここでは仏弟子の尼僧となっている。kataṃ buddhassa sāsanaṃ はゴータマ・ブッダが仏弟子に対して説き示す場合で，一方 katā te anusāsanī は仏弟子がその弟子に対する場合の表現のようで，その場合の教えは sāsana ではなく anusāsanī となり，両者で用法に区別のあることが，判る。また，仏弟子の場合，男女を区別する用法はないようである。

〔仏弟子＋sāsana の用例〕

ところが，「仏弟子の教え」でも sāsana が用いられている場合も一例見

られる。

「〔尼僧たちは〕その言葉，つまりパターチャーラ尼の教えを（Paṭācārāya sāsanaṃ）聞いて，・・・・・ブッダの教え（buddhasāsanaṃ）を実行した。」

tassā tā vacanaṃ sutvā, Paṭācārāya sāsanaṃ,・・・・・, akaṃsu buddhasāsanaṃ.（Thī. 119abf）

弟子の教えであるはずの anusāsanī がここでは sāsana となっている理由は，直前の 117偈 でブッダの教えの内容として「若者たちは杵を手にとって穀物をつき，若者たちは子供と妻を養いながら財産を得る。(musalāni gahetvāna, dhaññaṃ koṭṭenti mānavā, puttadārāni posentā, dhanaṃ vindanti mānavā.)」と説かれ，118偈 af 句でそのブッダの教えを実行せよ（karotha buddhasāsanaṃ）と述べているのを受けて説かれたもので，ここでパターチャーラ尼が説いた教えはブッダの言葉による教えを指すのであって，パターチャーラ尼自身が語った教えではなかったからであろう。したがって，sāsana という語が用いられたのであって，anusāsanī とはならなかったのであろう。それは，また119偈 f 句で「ブッダの教え（buddhasāsanaṃ）を実行した」と重ねて示していることからも判断できる。anusāsanī の場合は，ブッダの教えた言葉に則しながらも仏弟子自身の表現によって説いた教えであるからである。先に記した Thī. 126偈の例では，パターチャーラ尼自身の教えである場合は anusāsanī と表現されていることから，そのように解釈できるのである。

要するに，この例はブッダと仏弟子の「教え」の語が sāsana と anusāsanī とに峻別されていたことを明示するものである。

(5) dhammaṃ deseti について

こうした sāsana の用法に対して，同じく「教え」と訳されている dhamma の用例を取り上げ，sāsana の場合のようにブッダと仏弟子に用法の相違があるのかどうか調べてみよう。取り上げるのは，dhammaṃ deseti という用例である。

「ブッダは教えを説いた。」

buddho dhammam adesesi（SN. V-6-3）

「世尊は，・・・比丘たちに教えを説く。」

bhagavā・・・, bhikkhūnaṃ dhammaṃ deseti.（Sn. 1015ac）

「〔真理を見る〕眼をもつ世尊・ブッダは，他の人のために教えを説いた。」

aññassa bhagavā buddho, dhammaṃ desesi cakkhumā,（Th. 995ab）

いずれも，sāsana の場合と同様に，ブッダ・世尊が「教え（dhamma）を説く」という表現が見られる。[52]

ところが，仏弟子が説く dhamma の用法は，sāsana の場合とは異なっているのである。以下の用例からそのことが判る。

「サーリプッタは，・・・比丘たちに教えを説く。」

Sāriputto・・・, dhammaṃ deseti bhikkhunaṃ.（Th. 1231cd, cf. SN. VIII-6-6）

「苦しみの彼岸に達した，かの沈黙の聖者は私のために教えを説いた」

so me dhammam adesesi, muni dukkhassa pāragū,（Th. 1254ab）

これはヴァンギーサ長老が詠ったもので，一般的な聖者が主語となっている。

「かの〔尼僧〕は，私のために教えを説いた」

sā me dhammam adesesi（Thī. 170c）

これらの用例から，「教え（dhamma）を説く」のは，サーリプッタであったり，特定されないが聖者であったり，また尼僧であったりもする。また，類似表現にも

「ソーナはブッダたちの中で最もすぐれたお方の面前で正しい教えを説いた。」

Soṇo abhāsi saddhammaṃ, buddhaseṭṭhassa sammukhā.（Th. 368cd）

と，ソーナ・クティカンナが正しい教えを説いた（abhāsi saddhammaṃ）と表現されている。

このdhammaṃ desetiの用例以外でも，例えばウッタマー尼僧が信頼する尼僧の教えを聞くという場合に，その教えがdhammaとなっており，仏弟子の教えにもdhammaが用いられている例が見られる。[53]

さて，このように「教え（dhamma）を説く」という表現の場合のdhammaは，sāsanaの場合とは異なって，ブッダであろうと，仏弟子であろうと，説く主体者によって語の使い分けはされていないということが判る。[54] つまり，dhammaṃ desetiという表現（類似形も含む）の主語はブッダ・世尊は勿論のこと仏弟子や尼僧にも用いられている。dhammaを説くのはブッダに限定されていないことが判る。それに対して，sāsanaが用いられるのはブッダの場合のみであって，仏弟子の時はanusāsanīの形をとる。dhammaが変わらないのに対して，sāsanaの場合は形を変えることが判る。[55] この差異は，両者が共に「教え」と訳されても，dhammaは真理に基づいた思想や教え自体を意味しているので普遍的であり，[56] ブッダが説いても仏弟子が説いても同じdhammaであるのに対して，sāsana（√śās）は言葉として具体的に説かれた教えであるので，ブッダの発した教えと仏弟子の発した教えは同じではないという理由によるのであろう。また，当

時の仏教は口伝であったため，誰が発言した説示であるのかをはっきりと主従・上下の関係を区別するために峻別されていたのかもしれない。sāsana のこうした用例が多いのも，当時の口伝を反映した結果とも，或いはその痕跡とも理解できるかもしれない。そう考えると，一概に「教え」といっても，その意味する内容や状況によって区別され用いられていたことがよく判る。[57]

(6) ま　と　め

本論の内容を以下にまとめてみる。

(1) ブッダ（ゴータマ・ブッダ）と仏弟子の宗教的表現を涅槃，解脱，煩悩の消滅，三明などから比較すると，両者間にはほとんど差異は見られなかった。このことから，最初期の仏教では理想的な修行生活を成し遂げた仏弟子の中にはゴータマ・ブッダと同等な宗教的境地を体得していた者もいたと考えられる。

(2) ただ，仏弟子の表現にはなく，ゴータマ・ブッダだけに見られる表現もある。それは，呼称など一部の表現は別として，衆生への救済者という宗教的表現である。

(3) ブッダと仏弟子の主従関係は，主に anu- 接頭辞を付すことによって表現される例が多い。そのうち，anujāta のような時間的な前後の主従関係を表す用語と，cakkānuvattaka に見られるような教えの相続を意味する主従関係が見られる。多くは，後者の用例である。こうした表現は，要するに仏教教団における両者の立場の相違を明示しているもので，ゴータマ・ブッダの教えは順次に仏弟子に伝えられ，教団におけるブッダと仏弟子との主従関係，更には上下関係を示したものと言え

る。このような関係は，いうまでもなく仏教の大前提と見做しうる立場である。

(4) sāsana の語法についていえば，「ブッダの教え（sāsana）」と「仏弟子の教え（anusāsanī）」という表現のようにブッダと仏弟子に応じて「教え」の語形を変え，明確に両者の主従関係を峻別している。前者はゴータマ・ブッダから仏弟子への場合に，そして後者は仏弟子からその弟子への場合に用いられている。

(5)「ブッダの教え（buddhassa sāsanaṃ）」の sāsana の用法はブッダと仏弟子とで相違があるが，類似表現の「教えを説く（dhammaṃ deseti）」という表現の dhamma の場合は，それとは違いブッダも仏弟子も区別なく用いられている。こうした用法から判断して，「教え」と一般に表現されている両語も，sāsana は言葉として具体的に説かれた教えを指す語であるのに対して，dhamma は真理に基づいた思想や教えという，ある意味普遍性を有する語である理由から，ブッダも仏弟子も同様に用いられたものと考えられる。そのことによって，両語の用法に相違が生じたのであろう。

〔註記〕

本書で用いた略語は，以下の通りで，すべて PTS 版による。Dhp = Dhammapada, DN = Dīghanikāya, MN = Majjhimanikāya, Sn = Suttanipāta, SN = Saṃyuttanikāya, Th = Theragāthā, Thī = Therīgāthā,

註

(1) 詳細は，並川孝儀『ゴータマ・ブッダ考』大蔵出版　2005年 pp. 37–51を参照されたい。

(2) Th. 38, 1184.
(3) Th. 516, Thī. 320, 334.
(4) Th. 491, 890.
(5) Th. 839.
(6) SN. IV-3-5-2.
(7) SN. I-4-5-7.
(8) Th. 344.
(9) Sn. 560.
(10) Thī. 389.
(11) SN. X-7-4.
(12) Th. 486, 1022.
(13), (14) Sn. 647, Thī. 63.
(15) Th. 516, Thī. 320.
(16) Th. 658, 1017, SN. II-1-9, II-1-10.
(17) Th. 632, Thī. 320.
(18) Th. 1046, Thī. 53, 132.
(19) Dhp. 422, Thī. 106.
(20) Th. 5, 689, Thī. 66, SN. II-3-9-12.
(21) Th. 1083, 1184, SN. I-4-5-7.
(22) Dhp. 422, Th. 221, Thī. 251, 290.
(23) Th. 648, SN. I-4-5-7.
(24) Th. 1, 689, 1014, 1083, Thī. 105.
(25) Th. 1046.
(26) Th. 1158.
(27) Thī. 157.
(28) Th. 1084.
(29) MN. II p. 144G.
(30) Th. 709.
(31) Th. 912, Thī. 135.
(32) Th. 20, 709.
(33) Sāratthappakāsinī, I, p. 251, Udānaṭṭhakathā, p. 58.

(34) Samantapāsādikā, I, p. 187.

(35) 並川孝儀『ゴータマ・ブッダ考』大蔵出版　2005年　pp. 59–63.

(36) 同，pp. 24–36.

(37) Samantapāsādikā, I, p. 187, Sāratthappakāsinī, I, p. 282.

(38) Th. 365cd. テキストでは，sahāvasiṃ となっているが，ここは 1 人称. sg. aor. の sahavāsiṃ と読む。

(39) Sn. 997a, 1004b, 1006b etc.

(40) 「師」の定義は，註釈文献によると「師とは，世尊であり，隊商の指導者である。（中略）そのように，隊商の指導者である師，世尊は人々を難所から救い，生存の難所から救い出すのである」と解釈されている。Samantapāsādikā, I, p. 121.

(41) Th. 18ab, cf. 1058a, 1248c, Thī. 63a.

(42) Th. 348c.

(43) Th. 1169c, cf. 1168c.

(44) Th. 174, 348, Thī. 46, 384.

(45) buddhānubuddhāsāvakā, SN. II. p. 203。ただし，対応する漢訳経典にはこの複合詞の訳語は見られない。

(46) Jātaka, I, p. 408.

(47) 散文資料にも「サーリプッタよ，そのように実にあなたは私が転じた最上の真理の輪をその通りに転じる（tvaṃ Sāriputta mayā anuttaraṃ dhammacakkaṃ pavattitaṃ sammadeva anupavattesi）」とある。SN. VIII–7–6.

(48) anu- 接頭辞の付いた動詞の中，anusāsati（anu-√śās）の用例には仏弟子ではなくブッダに用いられている例のあることを，発表時にコメンテイターから指摘を受けた。筆者の知る限り，Sn. にその用例は数例見られるが，そのうち一例は五章の序の偈（1002d）の「法によって統治する（dhammena-m-anusāsati）」という例で，ここでの論点とは違ったものである。関連するのは，「ゴータマよ・・・尊師は私に教えてください（Gotama・・・anusāsatu maṃ bhavaṃ）」（461ab）と「真のバラモンよ，慈しみをもって遠離の法を教えてください（anusāsa brahme karuṇāyamāno vivekadhammaṃ）」（1065ab）の例であろう。両者とも，

anu-√śās の imperative. sg. 3および 2 人称の形で，文脈上からブッダ・世尊が主語となった例である。なぜ，anu- 接頭辞が付いているのか，その理由は定かではないが，本論の主題であるブッダと仏弟子に関連する用例ではないので，ここではそれを紹介するに止めておきたい。

(49) Th. 24d, 55d, 66d, Thī. 26d, 36d, 38f, SN. VIII-12-2, etc.

(50) 因みに，samāgate asitavhayassa sāsane「アシタ（誕生直後の仏を占った仙人）という名の仙人の教えが現実になった時に」（Sn. 698d）の sāsane の用例は，他と少し異なる。この sāsane は「予言」に近い意味であろう。

(51) DN. III. p. 156, ll. 1-2.

(52) それ以外にも，Gotama が主語となった例もある。Thī. 136cd, 155ab.

(53) これは，すでに本文でも取り上げた「彼女が私（ウッタマー尼）に説いた通りに彼女の教えを聞いて（tassā dhammaṃ suṇitvāna, yathā maṃ anusāsi sā）」（Thī. 44ab）にその例を見ることができる。

(54) 散文資料にも，アヌルッダやスッカー尼僧などの例が知れる。SN. X-6-2, X-9-2.

(55) dhammaṃ deseti の deseti（√diś）は，この dhamma 以外の語も目的語として用いられている。たとえば「その人々はブッダの教えを説いているスッカーに仕えない（ye Sukkaṃ na upāsanti, desentiṃ buddhasāsanaṃ）」（Thī. 54cd）で，その目的語は buddhasāsana となっており，説いた者が仏弟子のスッカーという名の尼僧となっている。dhamma を目的語とする場合は，仏弟子もブッダと変わらなく用いられたが，sāsana の場合は単独では用いられず，buddhasāsana のように「ブッダの教え」と特定して用いられている。このように，仏弟子が教える時には sāsana は単独では用いられず，「ブッダの教え」というようにブッダに特定されている点に留意したい。この用法は，上述したように仏弟子の場合では sāsana ではなく，anusāsanī のような anu-√śās の派生語が用いられていることと連動している。要するに，sāsana の場合はブッダと仏弟子の用法に明確な区分がなされているということである。

(56) dhamma の用法は多様であるが，中でも「真理」と「教え」という意味の場合，どちらかの意味であるのかを特定する見解は一定していない

ように思われる。その点については dhammānudhamma や dhamma-sudhammatā などの用例を通じて論じたいが，それは別の稿で論じる予定である。

(57) こうした sāsana や dhamma の用例の相違によって，また，たとえば後の部派仏教などで「仏説（buddhavacana）」として解釈される語が初期経典ではどのような用語に該当するのかなどを考えさせてくれる。その場合，「仏説」の「説」がそのどちらの用法を指しているのか，またそれ以外なのか興味深いが，vacana（√vac）の意味から判断すると，sāsana（√śās）の意味するところと関連があるようで，その用法も近似しているように思える。とすれば，部派仏教などで用いられる「仏説」という語は，厳密にいえばゴータマ・ブッダ自身の言葉で語られた教えそのものを指すものと理解されていたのではないかと考えられる。